ジャイアントキリン群

そるとばたあ

朝練のグラウンドでキリンの群れに遭遇した。
目の錯覚でもないし、ここは動物園でもなければ、サバンナでもない。なんの変哲もない高校の野球場だ。
「いつからここはサファリパークになったんだ？」
遅れてやってきた高橋がおれの肩をつかんだ。
「檻に入ってないし、柵もないむきだしだな」
「ってことは野生かよ？　野良キリンじゃん」
野良犬一匹すら見かけない町に、野良キリンの群れがいるのかは大きな疑問だ。
キリンの群れは、外野の奥辺りに生い茂る草をむしゃむしゃと食べているようだった。もしくは、朝露をまとった葉っぱで喉を潤しているのかもしれない。なんて、悠長にキリンウォッチングを楽しんでいる場合ではない。
入口には、すでにほかのレギュラーメンバーも集まっていて、突如として現れたキリンの群れについての見解を話し合っていた。
近くの動物園から脱走した説。そもそもこの近くに動物園はない。
町にやってきたサーカスから脱走した説。そもそもこの町にサーカスがやってきていない。
ここはまだ夢の中説。さっきから何度も頬を叩いているし、叩いてもらっていて痛い。
あのキリンの群れは幻説。この説は半分、有力だった。というのも、早めに集合していた一年生の大部分にはキリンの群れが見えていないようで、夏の大会のベンチ入りメンバーだけがキリンの姿を確認できて騒いでいたからだ。
そして、もうひとつの疑問。
「あのキリン、ちょっと大きくないか？」
その疑問を高橋が口にした。そうだ。動物園や映像で見るキリンよりも明らかに大きいのだ。
「その謎、解けちゃいましたよ。先輩」
得意げにそう口を開いたのは、二年生でお調子者の木元だった。みんなの視線が木元に集まる。
「まったく、やかましい奴め」
「先輩、今朝の朝刊見ました？」
「いや」
木元は、それは好都合といった顔で、手に持っていた朝刊を広げた。それは地方紙のスポーツ欄で、そこにはでかでかとこう書かれていた。
『ジャイアントキリング』
スポーツの試合などで、下位の者が上位の者を負かすこと。つまり、番狂わせだ。
おれたち野球部は地方予選の準々決勝で、春の全国大会の優勝校に勝った。
紙面には、昨日の激戦のスコアとともに写真も掲載されていて、勝ったおれたちより敗戦した

選手の顔が大きく写っている。彼はプロ注目の投手だった。改めて、おれたちが成し遂げたことの大きさを一晩たって実感した。

「ジャイアントキリン群ですよ。だから、普通のキリンよりもでかいんです」

記事を読んでいたおれの顔を覗きこむ木元。その目は真剣だ。

ほかの部員は笑っていたが、木元のその説こそが最も有力な気がしてきた。

「おい、いつまで昨日の余韻に浸っているんだ！ 早くグラウンドに……ひゃあ」

もちろん、ベンチにいる監督にもキリンの姿は見えたようで話は早かった。

いざ、練習を開始してもキリンの群れは草を食べていた。

ランニングしながら、キリンを観察してみる。キリンの代名詞ともいえる長く伸びた首に、茶色のまだら模様、頭の上の角。どこからどう見てもキリンだし、こんなに近くで本物を見たことがなかったので、恐怖以上に感動的な体験だった。

「先輩、生キリンですよ。生キリン」

木元は相変わらずふざけている。

「生プリンみたくいうな」

なんとも気の抜けたやりとりだ。

草食系らしく、おとなしく草を食べていたキリンが動き始めたのは、キャッチボールのときだった。

二人一組となって肩を作っていると、キリンたちがのそのそと移動してきて、部員をとりかこんだ。至近距離から見上げると、その体長は信号機よりも高い。

「まさか、おれたち食べられるんですかね？」

冗談をいいながら木元が投げた球は、受け手の遥か頭上を越える暴投となった。

その瞬間だった。一頭のキリンが尻尾で木元の尻を叩いたのだ。

不意なキリンからのケツバットに木元は反射的に帽子をとり、キリンに頭を下げた。すると、キリンは長い首を器用に下げて、木元の顔を舌でベロンとひとなめ。

「先輩、友達になれましたよ」という木元に、

「なめられているんだよ」

とおれが返すと、キリンも頷いた。不思議とキリンの言わんとしていることが理解できた気がして、おれは帽子のツバに手をやり感謝を伝えた。

キリンの群れは、おれたちの練習をじっと見守っていた。

ときには、技術的な指導もしてくれた。もちろん、会話をすることはできないが妙に通じあうことができた。

バッティング練習では、うまく使えていない体の部分を尻尾で指摘してくれたし、打球を飛ばす方向などは二頭のキリンが首の角度でこの辺だと教えてくれた。

守備練習では、外野フライの捕球をその大きな体を揺らしながら走って教えてくれた。捕球の位置がやたら高いことは真似できないが、盗めるところを盗んだ。

走塁練習では、後ろから追いかけてきた。こんなに走塁ミスがアウトに繋がる練習はなかった。

なので、自然とスタートも良くなり、走塁の無駄が解消された。

夕方になって練習を終え、グラウンド整備をしながら、外野付近で戯れているキリンの群れを見ていると、雄大な大自然の中にいるような感覚だった。

そんな練習風景を見ていた監督も、キリンたちを信頼していた。その中でも、ボス的存在のキリンがいて、彼のことをキリンヘッドコーチ、略して『キリンヘッド』と呼んでいる。木元にケツバットをしたあのキリンだ。

「先輩、この練習、面白いですよ」

安定のふざけた口調の木元が、寝転んでいるキリンの首をタッチしていた。しかも、キリンヘッドじゃないか。まったく、こりない奴め。よく見ると、キリンのまだら模様の部分がランダムに点滅している。素振りをとめて、おれはその様子をしばらく見ていた。

「動体視力を鍛える練習っぽいです。なんかゲーセンみたい」

木元のその余計な一言がきっかけとなったのか、模様の点滅速度がどんどんと加速していった。左右に振られ、へとへとになった木元が「ギブ」とキリンの首にしがみついた瞬間、古代ギリシャの投石機のように首がしなり、遠くへと投げ飛ばされた。ほかのキリンがキャッチしてくれて助かったが、キリンヘッドの厳しさを見たシーンでもあった。それから、木元は心を入れかえたのか、誰よりも元気なかけ声でチームを鼓舞して練習に励むようになった。

ジャイアントキリングを成し遂げ、ふわふわとしていたチームもひとつにまとまりつつあった。

次こそが真価の問われる試合だ。

そして、高い場所の葉っぱを食べるために進化したキリンたちの応援もあり、次の試合に勝つことができた。

決勝戦の前夜。

あとひとつで全国大会だと思うと、なんだか落ち着かなかった。素振り用のバットを持って家を抜けだし、少し遠くの公園までおれは自転車をこいだ。

誰もいないと思っていたのに、そこには先客がいて、何かが壁にぶつかる音が公園内に響いていた。近づいていくと、ひとりの男性が壁に向かってひたすら投球練習をしている。照明がその男性の顔を照らした。

「あっ」

優勝候補だった高校のエースじゃないか。紙面を飾っていた彼の顔を思いだす。

「あぁ。こんばんは」

彼もこちらに気づいた。

とはいえ、こんな真夜中の公園で何を話せばよいのか。

「明日、決勝戦ですね」

タオルで汗を拭きながら、彼は言った。

「眠れなくて」

質問に対して少しズレた返答をしてしまい、どうしようかと考えていると、彼の後ろの茂みから何かがでてきた。

猫かと思ったら、それはまさかのネコ科、ライオンだった。威厳あふれるたてがみの迫力にその場

で立ちすくむ。
「もしかして、見えています？」
「は、はい。うちはキリンなんで……あっ」
また少しズレた返答とともに、思わず口を滑らせると、彼が笑いだした。
「それって、ジャイアントキリンですよね？」
「は、はい」
「実は、ぼくらが二年生の頃に出会っているんですよ。その頃のチームはまだ強くなくて、それこそ全国大会の常連校に奇跡的に勝った試合の翌日でした。グラウンドにキリンの群れがいたんですよ。ちょっと大きめの」
一緒だ。
「今は、ライオンが？」
「こいつは、きみたちに負けた翌日に現れたんだ。きっと、油断があったんだろうね。谷底に落ちたような気持ちだったから。ここから這い上がれってことなのかな」
ボールに語りかけるように話す彼の目は、その先をすでに見据えているようだった。
「明日の試合は観に行かない。でも、とても楽しみにしています。後ろにいる名コーチの腕前は知っているからね」
振り返ると、公園のイチョウの木の陰からキリンヘッドがひょいと顔をだした。口の周りには葉っぱがくっついている。
いつからいたんだよ、お前。
キリンはほとんど寝ないらしい。

翌日の決勝戦は、長いキリンの首もさらに長くなるほどのシーソーゲームだった。
キリンたちはといえば、外野席の芝生でまばらな観客の間から観戦している。
粘りに粘って追いついた延長戦。一点差負けで迎えたおれたちの裏の攻撃。
「野球は九回からだぞ！　あっ、今、十一回だった。どっちにしろ絶対、勝つぞ！」
円陣の真ん中で木元が叫んだ。この数日で、ムードメーカーとしての資質が開花したようだ。
先頭打者の木元がしぶとくヒットで出塁した。
高橋が確実にバントで送り、チャンスを広げる。
「先輩！　ここで打ったら大ヒーローですよ」
セカンドベース上の木元が声をかけてきた。
「まったく、たのもしい奴め」
驚くほど手ごたえのない感触だった。高く飛んだ打球は、レフトスタンドへと吸い込まれていった。
サヨナラホームラン。
歓声がわきあがる。ひとつ、ひとつ、ベースを踏んでいく。
その外野席にキリンの群れはもういなかった。
ダイヤモンドをまわりながら、急に泣きそうになった。
でも、キリンたちは鳴かないよな、と思いだし笑うことにした。

キリンのように腕をまっすぐと突きあげる。
ベンチから飛びだしてきた、同じく腕を突きあげたリトルキリン群の待つホームベースにおれは飛びこんだ。